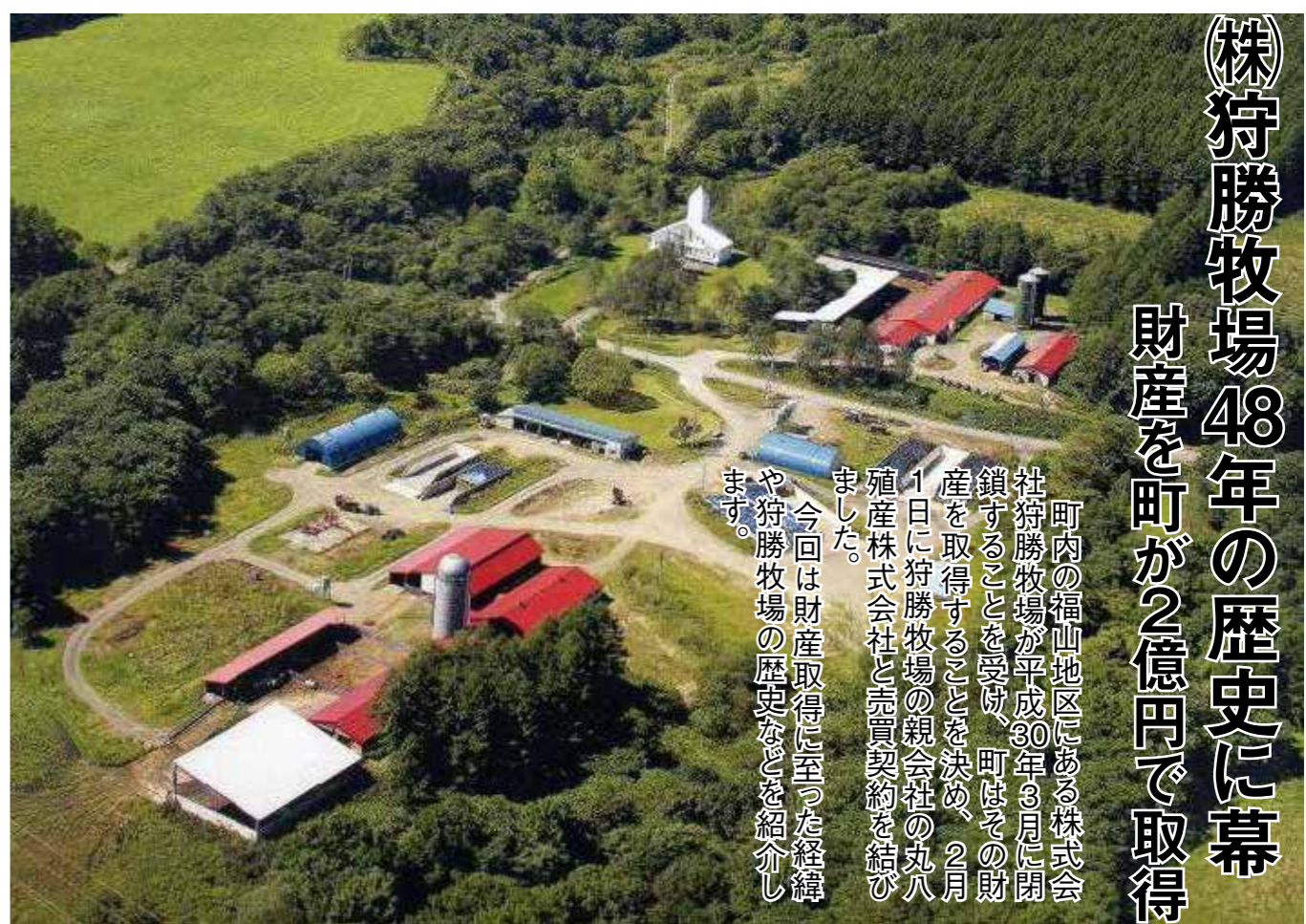


株 狩勝牧場48年の歴史に幕 財産を町が2億円で取得



町内の福山地区にある株式会社狩勝牧場が平成30年3月に閉鎖することを決め、町はその財産を取得することを決め、2月1日に狩勝牧場の親会社の丸八殖産株式会社と売買契約を結びました。
今回は財産取得に至った経緯や狩勝牧場の歴史などを紹介します。

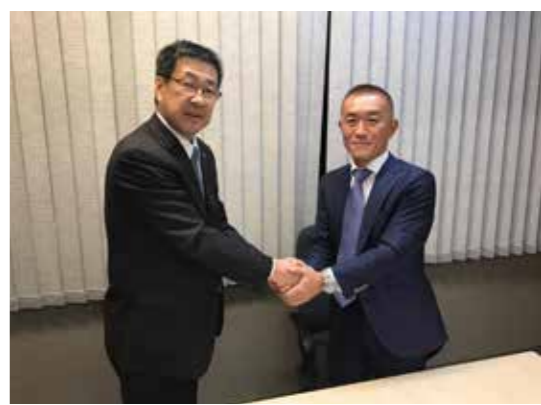
農地の有効利用へ

町が平成30年3月に閉鎖する株式会社狩勝牧場の財産取得に動き出したのは昨年の12月。土地売却による農地の分散化、海外資本による林地の買収などの懸念があり、第一次産業に必要な土地は地元の人所有すべきとの考えのもと、農地を町が買取り、その後貸し付けを行い、適切な時期がきたら、適切な相手に売り払う「町農地利用集積円滑化事業」を活用し、狩勝牧場を一括で購入することとしました。

浜田正利町長は12月14日、狩勝牧場を運営する丸八殖産株式会社（東京都）の神谷昌良代表取締役社長のもとを訪れ、町の考え方を説明し、神谷社長から賛同をいただき、一括売却による同意を得ました。その後、1月24日に町議会の承認を得て、2月1日、狩勝牧場の財産取得にかかる売買契約（本契約）を結びました。

農地は4月1日から、酪農の新規参入者を含め担い手育成を目的とした研修農場である、株式会社シントクアユニルク（代表取締役・太田眞弘新得町農業協同組合長）の自給飼料確保のために貸し付けを行う予定で協議を進めています。林地は町有林として管理をしていきます。

また、牧場内の建物は町で管理



浜田正利町長（左）と神谷昌良社長（右）

しながら新得町農業協同組合など関係機関と農業振興活用策を協議していく予定です。

「取得金額」	
200,000,000 円	（固定資産税については、土地取得完了後月割り計算で支出）
「土地面積と評価額」	
■土地	
・農地	1,320,252 ㎡ = 126,201,294 円
・林地	1,842,053 ㎡ = 15,044,297 円
・宅地	62,976 ㎡ = 11,895,503 円
・その他	480,763 ㎡ = 3,029,455 円
■立木	
・カラマツ	31,860,000 円
・グイマツ等人工林	3,304,800 円
・天然林	4,050,000 円

※牛舎、事務所等の建物については、無償譲渡（評価額 60,630,396 円）

狩勝牧場のはじまり

当時の記録によると、株式会社狩勝牧場を設立するきっかけは、トヨタ自動車販売株式会社（現在のトヨタ自動車株式会社）の神谷正太郎社長が、昭和43年11月3日、秋の叙勲で勲二等に叙された記念に、地域への報恩事業を考えたことでした。

神谷社長は、旧知の間柄にあった北海道開発庁（現在の国土交通省北海道局）の木村武雄長官に相談。当時の北海道は、酪農近代化への途上であり、大模範牧場の建設が望まれていることを知り、町村金五北海道知事の紹介を得て、本町をはじめ道内4ヶ所の候補地を紹介されました。

本町では、平野栄次町長を会長とする大型牧場誘致期成会を設置。神谷社長に対して直接懇請を重ねました。

最終的には、位置、面積、自然条件などから他の候補地を退け福山区が最適地として判断されました。

昭和44年には、基本計画が立てられ、昭和45年に株式会社日啓社狩勝牧場が早川晋八場長以下6人により発足。牧草播種、牛舎建設、附帯設備の整備、機械導入等と牧場建設が始まり、育成牛24頭、初妊牛30頭が導入されました。昭和46年1月1日から生乳の生産がスタート。初年度は160トンを出荷しました。その後、施設の拡充、乳牛の増頭が着実に進められ、昭和50年には622トンとなりました。昭和53年には株式会社狩勝牧場に改称されました。平成元年には念願の1000トンを超える1029トンを出荷。以降も、酪農経営の厳しさが増す中でも、高水準の安定的な経営を維持し、出荷乳量は平成24年には1780トンとなりました。



北海道農業の近代化への貢献

昭和44年当時、ほとんどの牧場の牛舎が牛を「首かせ」でつなぐスタンション方式でしたが、狩勝牧場では牛をつながないで、餌を自由に食べさせるフリーストール方式を採用しました。



他にも、昭和40年後半には暗渠排水用パイプの強度、排水の副資材の試験を行い、各種公共事業等の対象となる排水パイプの製品化への協力を行いました。

昭和40年当時は、暗渠に使用されていたのは素焼きの土管であり、狩勝牧場で何年にもわたるテストを行い、現在使用されている黒いパイプが製品化されました。

牧場の発展にかけた思い

昭和54年4月から狩勝牧場の牧場長を務めている吉本和之さんにお話を聞きました。

「牧場ができた当時は大変だった。最初は乳も出ないし、今のようには機械力もなかった。牛も餌も改良されて乳量が増えてきた」と当時を思い出していました。

当時は、牧草の収穫も人海戦術で、夜も星を見ながら作業にあたり、夏休みに大学生が手伝いに来たりもしたそうです。

「ほとんど休みなく働いていた。朝から搾乳して、畑もやって、夜の搾乳終わって牧草の片付けやったら夜中になってた。その当時はそれが当たり前だった」と当時の大変さを語ってくれました。

町が狩勝牧場を購入したことに、経営に行き詰まったわけではないが、将来を考えたときに、これ以上続けることは難しいと考えていた。50年近く新得町で牧場を続けてきて、なんとか地元に残して、地元で使ってほしいという思いがあった。畑も山もあるし、事務所も自宅も有効に使ってほしい。ここで閉めるのは悔しい部分もあるけど、牧場長を新たに探すのも難しい。投資や人の問題などいろいろと考えて社長に閉鎖を提案した」と話しました。